

氏名(国籍)	お- 吳	そん 聖	すく 淑	(韓 国)
学位の種類	博 士 (文 学)			
学位記番号	博 甲 第 4196 号			
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	文学・文化・メディアが生成した〈煤煙事件〉表象			

主 査	筑波大学教授	博士(文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授		名 波 弘 彰
副 査	筑波大学助教授		小 松 建 男
副 査	筑波大学講師		平 石 典 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、明治 41 年 3 月 21 日から 24 日にかけて、作家・森田草平と女学生・平塚明子（のちの、平塚らいてう）が起こした、いわゆる「煤煙事件」を研究対象として、とりわけ新聞メディア報道が生成した現実とその意味を追究したものである。

本論文の構成は、以下の通り。

- 序章 〈煤煙事件〉とは何か？
- 第一部 森田草平の〈煤煙事件〉 — 文学的事件としての側面
 - 第一章 なぜ〈煤煙事件〉が起きたのか
 - 「コンフェションの文学」をめざした文学志望青年を中心に
 - 第二章 メディアの『煤煙』戦略
 - 第三章 テキスト『煤煙』の成立 — メディアと文学の交渉
- 第二部 平塚らいてうの〈煤煙事件〉 — 社会・文化的事件としての側面
 - 第四章 女学生をめぐるメディアの言説と欲望
 - 女学生の系譜における〈性^{セクシュアリティ}〉と「知」
 - 第五章 せめぎあう明子（平塚らいてう）像
 - 〈煤煙事件〉をめぐる〈性^{セクシュアリティ}〉と〈自我〉のメディア言説
 - 第六章 「私」を通して見た〈新しい女〉像
 - 〈らいてう／平塚明子／平塚らいてう〉の「峠」を通して
- 結 章

序章では、明治 41 年 3 月 23 日、『東京二六新聞』の「令嬢の紛失」という記事からはじまり、29 日頃までつづいた新聞メディアの報道状況、また、その後の『日本』などの雑誌に掲載された事件をめぐる論評などを紹介し、「煤煙事件」がメディアではどのようにとらえられていたか、その概要を説明している。

第一部では、「煤煙事件」が、実は、文学志望青年・森田草平が起こした「文学」的な事件であるとする仮説から、事件当事者の森田草平にとって、この事件とはどのようなものであり、なぜそれを起こしたのか、さらにこの事件を題材として彼が書いた『東京朝日新聞』の連載小説「煤煙」がどのようなものであったかを考察し、日本近代文学史上、この事件と『煤煙』がどのような位置にあるのかを追究している。

第一章は、メディアがほとんど注目することのなかった森田側からみて、この「煤煙事件」がどのような様相を呈するかを追究し、当時の文壇状況から、夏目漱石に示唆された「コンフェションの文学」作品を生成する目的で、実際に体験することを企てた森田の意図的事件であることを検証している。

新聞メディアは、「煤煙事件」を扇情的な社会問題として連日報じたが、第二章は、そこにみられる言説を中心に考察し、なぜ主要新聞メディアが、競って書き立てたかを検討し、その背後にはメディア戦略のあったことを指摘している。

第三章は、第一章で検証した作家・森田の戦略と、第二章で検証したメディア戦略が、作品『煤煙』の中でどのように作用しているかを分析し、いかに『煤煙』が、文学とメディアの交渉の過程で成立したかを追究している。

第二部は、「煤煙事件」をもうひとりの当事者・平塚明子（らいてう）の観点から考察し、それを近代日本における文化的・社会的事件として記述することを目的としている。

第四章は、メディア言説で、いわゆる「女学生」表象がどのように生産・流通したかを分析し、男性中心主義的メディアの構築した「女性」の「性（セクシュアリティ）」と「自我」をめぐる言説を系譜的に記述している。

第五章は、主として、平塚明子が「女性」として、どのように時代と闘ったかをめぐり追究している。とりわけ、メディアが、明子をどのような「ジェンダー」的役割で囲い込もうとしたのか、そして、これに対して明子は、どのような闘いをしてメディアの中で発言していたかを検討している。

第六章は、メディア言説の編成に取り込まれた明子の発言を中心に論述を展開し、明子がどのように「愛」と「自我」の相克を語り、「性」と「自我」を女性の「主体的自由」として確立しようとしていたかを、彼女が「告白」という文学ジャンルで書き、未完に終わった作品「峠」を分析することで追究している。

結章では、煤煙事件の周辺の事情をのべ、これまで追究してきた論点を整理してそれと関連づけている。

審査の結果の要旨

「煤煙事件」をめぐる従来の研究はそれほど多くはなく、あっても、それを謎の事件として言及するにとどまり、具体的な調査・研究はなされていなかった。その数少ない先行論では、この事件を「両性の闘争」時代の幕開けを象徴する事件と位置づけ、そのため、平塚らいてうの「新しい女」、あるいは女性解放運動家の側面のみが読まれ、事件当事者であった「平塚明子」を解明することはなかったとする。

本論文の独創性は、この点に着眼し、「平塚明子」像を明確にするだけでなく、その相手であった森田草平の意図的営為であったことを、当時の新聞メディア資料を渉猟し、また、その事件を表象したふたりの作品、『煤煙』と「峠」を綿密に分析することで、明確にしたことにある。

成果はそれにとどまらない。森田の意図が「コンフェション文学」を生みだすことにあったこと、平塚明子がいかに「性」と「自我」の問題を抱えていたかということ、さらに、ふたりの失踪事件が、なぜメディアに注目されたかや、その事件がいかに「煤煙事件」に構築されていったかなど、こうした問題を当時の新聞メディア戦略との関係で論じ、さらに、それがいかに同時代の言説によって構築されていたかを解明したことがあげられる。

こうした優れた成果を上げた論文ではあるが、望まれることがないわけではない。まず、ふたりの作品だ

けでなく、関連メディア資料の扱いが、事件という一点に絞った読みしかなされていないために、全体が「事件の真相」追究に終始している印象を与えることである。もう少し、テキストの多義性を読み取り、そこから事件へとつないでいった方が、この研究に幅と応用力をもたせたのではないかと思える。極端に言えば、論全体が、まず結論ありきで、それを検証する形をとっているという印象がある。そして、この事件が、単なる個人の人騒がせな利己的行動でしかなかったということにならないようにするためには、もっと広範な状況と結びつけていかななくてはならないであろう。

とはいえ、こうした欠点も、今後の課題としてよく、本論文が目指した範囲の問いには十分応えたものであり、関連学問領域に貢献するものとなっているところからも、学位論文に十分値するものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。